

中村光夫全集

第十一卷

筑摩書房

中村光夫全集 第十一卷
昭和四十八年三月三十日発行

著 者 中 村 光 夫

発行者 井 上 達 三
東京都千代田区神田小川町二ノ八

発行所 筑 摩 書 房
東京都千代田区神田小川町二ノ八

郵便番号 一〇一九一
電話 東京 七六五一(代表)
振替 東京 四 一 二 三
印刷株式会社 精 興 社
製本 牧 製 本 株 式 会 社

落丁・乱丁本はお取替いたします

(分類) 1395 (製品) 72511 (出版社) 4604

第十一卷 目次

明治・大正・昭和

一 西洋の圧迫	5
二 知識人の生き方	19
三 生活と創造	31
四 小説の前提	46
五 「近代」の結論	60
六 他者の登場	83
七 一つの仮説	99
あとがき	112
明治文学史	
序	115
第一章 明治初期	132

第二章	明治中期	184
第三章	明治末期	261
後記		304
日本の近代小説		
序		309
開化期の戯作・戯文		314
政治小説の季節		320
小説神髓と当世書生気質		329
浮雲		336
硯友社		341
鷗外・透谷・藤村		349
篁村・緑雨・一葉		355
観念小説から社会小説へ		362
自然主義の特質と先駆		375
花袋・藤村・泡鳴・秋声		381

大正期の特質	397
耽美派の作家	401
森鷗外	409
夏目漱石	414
白樺派	419
主知派と生活派	431
あとがき	442
日本の現代小説	
序言	447
素地と環境	448
新感覚派	461
プロレタリア文学	469
転向と「文芸復興」	493
昭和十年代	506
敗戦前後	525

新作家の出現	542
戦後文学の展開	553
風俗小説の隆盛	561
繁栄と危機	569
解説	589
佐竹昭広	
解題	599
年表	601
第十一卷詳細目次	713
索引	

文学史

明治・大正・昭和

一、西洋の圧迫

日本程、借金を拵へて貧乏震ひしてゐる国はありやしない。……西洋の圧迫を受けてゐる国民は、頭に余裕がないから、碌な仕事は出来ない。……日本国中何所を見渡したつて、輝いてゐる断面は一寸四方もないぢやないか。悉く暗黒だ。

——夏目漱石「それから」

「明治・大正・昭和」といふ題で、七回にわたつてお話をするわけであります。今日はその第一回、明治の部の一といふことになります。

まづ明治時代がどんなものか、明治文学が、どんな具合にして成立したか、といふやうなことを、お話ししようと思ひます。

二三日前のことでありますけれども、ある会合の帰りに、川端康成氏と自動車でもつて、いつしよに、鎌倉へ帰ることになりました、例の高速道路、芝浦から川崎の辺を通る、横浜へ行きます道を通つてをりまして、川崎の工業地帯のところを通りました。ご承知のやうに、あすこは、大へん工場が多いところで、夜でも、なんか火が燃えてゐるのが見えるやうなところでありますが、そこで珍しく月が出てをりました。ちやうどその前の日に、テレビで広重の展覧会をやつて、この辺の広重の絵を映してゐました。それで絵のなかの風景にくらべると、「どうも変らないのは月ばかりですね。」といふやうな話になりました。なるほど広重から百年たつて、これだけ変わったのかと思つてゐたら、川端さんが、「あと百年たつたら、こんどはどうなるでせうか。」といふやうなことを、

ぼつと云はれた。私は正直のところ、これは、今日の講演にいい前置きができたと思ひました。

明治時代といふことを考へる場合に、この百年の変化といふことを考へ、それから現在から百年先のことは、とても考へたつてわかりやしませんけど、将来を望んで過去を見るといふやうな態度、かういふ気持でかへりみる必要があるんぢやないかと思ひます。過去を過去として調べることも、学問のひとつでありますけれど、さういふことは、我々歴史の専門家でない人間が、それほど一生懸命やらなくてもいいことでありまして、我々としてはやつぱり、将来どうなるか、今後どうなるかといふ問題をいつも持ちながら、過去を見てゆく、かういふことが必要になるんぢやないかと思ひます。過去を知るといふことは、単に過去として、あることを調べるといふだけでなくて、我々が現在どういふ位置にゐるのか、あるひは将来どうなるか、さういふことを知るために過去を見る、かういふ態度が必要だといふより、我々には、さういふ態度しか実際はとれないんぢやないかと思ひます。つまり我々は生きてゐるのですから、生きてゐる以上は、どうしても未来に向つて進んでゆかなきやならぬ。過去は、その方向を知るために、その可能性を明かにするために知るといふことになるわけです。

川端さんの言葉で思ひ出したのは、やはりテレビであります。テレビばかり見てゐるやうで体裁がわるいのでありますが、しばらく前に、日本の百年とかいふ総題で、NHKで、日本に産業を興したり、鉄道を敷いたり、いろいろ貢献した外人たちの故国、ドイツであつたり、アメリカであつたり、あるひはフランスであつたりするのでありますが、そこへ訪ねていつて、その人たちの事跡を調べたり、あるひは子孫に会つて、いろんなインタビューして話を聞いたりする、かういふ企画が一年ばかり続いたことがあります。みなさんもきつとご覧になつたと思ひますが、あれを見て、いちばん感じたことは、ドイツなりアメリカへ行くと、さういふ技師たちの住んでゐた家とか、親戚などが、わりとよく残つてゐる。日本から出した手紙だとか、持つて帰つた記念品が、百年たつても大切に保存されてゐる場合が多い。ところが日本でさういふ人たちの事跡を調べるとなると、跡がほとんど残つてゐない。たとへばそのころ外人がつくつた工場は、とつくにこはされて新しいものになつてゐる。あるひは鉄道も百年の間に、全く面目を改めてしまつてゐる。どこか特別のところへ行かないと、その跡もない。

といふことは、日本のこの百年の間に経験した変化が、西洋の同じ百年の間に経た変化より、よほど激しい。向うが三ぐらゐしか変らないなら、こつちは八か十倍ぐらゐ変つてゐるんぢやないか。かういふことがあの企画に巧まずによく出てゐました。

おそらく、いまの若い方は、さういふ変化に慣れてゐて、これが当り前だといふふうにしてをられるだらうと思ひます、それは日本の歴史に例のないことでもあるし、また世界から見ても、こんなに激しく変つていく社会は、めつたにない。これが日本の近代百年のいちばんの特色だ、といふやうなことを、まづお話ししておきたいと思ひます。

しかし、一方から考へますと、日本の歴史が始まつて以来、二千年ぐらゐ経ちますけれども、日本ぐらゐ昔から一貫して変らない文化をもつてゐた国も少ないと云へるやうです。だいたい日本語が、ずるぶん方言がありまされど、単一の言葉だし、日本人が、どれだけの血が混つてできたか知らないけれど、歴史が始まつたときは、だいたい統一された民族であつて、単一の言葉を使ふ単一の民族が、海に囲まれた島の中に住んでゐる。といふのが何千年來変らない日本の特色であつたわけです。むしろ承知のやうに、大陸の文化の影響は、昔から受けてゐますが、大陸と日本との間が、適当に荒い海で隔てられてゐる。そのために、朝鮮、印度、その他いろいろの国もあるかもしれませんが、主として中国から受けた影響が軍事的、経済的といふやうな圧力にならないで、いつも文化的な範囲にとどまりました。海が荒くて交通が困難ですから、船をたくさんつらねて兵隊を送つてくるといふやうなことは、元の国が二度やつたぐらゐで、あとはほとんど云ふに足りない。侵略といふやうなことはなかつた。来たのは坊さんであつたり、学者であつたり、絵描きの職人であつたり、さういふ人たちで、這入つてくるものは軍事とか経済を抜きにした文化だけであつたわけです。ですから日本人は、要らないと思へば、その影響を拒否することもできた。

十六世紀にキリシタンが非常な勢ひで這入つてくる。西欧のスペイン、ポルトガルの勢力、まあ彼等の宗教であるカトリック教、かういふものが這入つてきてひろく民心をとらへました。しかし、いろんな点からいつて、

日本人はキリスト教が要らないといふふうには国家の支配者が決めると、あらゆる方法を尽してキリスト教を禁絶してしまふ、といふやうなことができた。これはいいことか悪いことかは別問題として、ああいふことをヨーロッパに近い国でやれば、必ず戦争になつてゐる。また十九世紀以後になつて、ああいふキリシタン弾圧をもしやつたら、これはもう何度戦争が起つてゐるかわからないぐらゐの事件です。さういふことを平気でやつて、別にあとに外国から禍ひが及ばなかつた。これも地理的に離れてゐたせゐです。

明治以前の西洋、あるひは中国の影響と明治以後の西洋の影響との違ひはそこにありまして、明治時代の特色もそこから導き出されると思ひます。

徳川時代の末に行ひましたいはゆる開国といふこと、これは当時の日本としては全くやりたくないことだつた。それを外国の圧力に負けて、仕方なしにやつた。かういふことは日本始まつて以来ないことであつたので、これが大事件であつたに違ひないわけでありませうけれども、それぢやどうしてさういふことになつたかと云ひますと、これは馬鹿馬鹿しいやうな話ですが、蒸気船の発明、いままで帆にたよつて、風がないと走れなかつた船が蒸気船が出現したことで、風にかまはず、自由に歩けるやうになつた。その結果、ヨーロッパの国々の行動半径が非常に拡がつてしまつて、いままで軍事的、経済的な圧力をかけることができなかつたやうなところにも、それが、どんどん及ぶやうになつた。ペリーを代表とする外国艦隊の渡来を我々の祖先は「黒船」といつて騒ぎました。彼等は西洋について具体的な知識はもたなかつたがやはり非常にカンがいいんで、敵の正体を見誤らなかつたと云へます。実際、あの「黒船」がいつさいの原因であつたと云つてもいいのです。

それですまゝ外国が、日本始まつて以来、軍事力、経済力として、圧迫を加へるやうになつて、このままでいけば日本の国の独立はおぼつかないといふことに、だれでも気がつかざるを得ないやうなときが来たのです。日本人としては非常に癪にさはることで、攘夷論がさかんに行はれたのも当然のことと云へます。夷狄を打ち攘へといふので、薩摩藩とか長州藩とかいふ、当時の大きな藩はイギリスや連合艦隊と実際に戦争をやりました。それで負けてしまつた。薩摩はそれほど負けなかつたと云つてゐるんですが、それにしても勝つわけにはとてもい

かなかつた。これはもう相手のほうが絶対強いんだから、このままでは駄目だ、これに打ち勝つためには、なんとかして相手の軍艦、大砲とか、あるひは工業力、さういふものを日本に取り入れなきやならん、かういふふうにみんな考へた。このやうに、考へをがらりと変へて、これまで排斥した相手を今度は先生と仰ぐことを、当時の言葉で「変通」といひました。

で、明治の西欧化といふものは、文化といふやうなことはあと回しでありまして、そんな贅沢なことを云つてゐるわけのものではなくて、まづ実用の方面、機械工業、軍事、さういふ方面で西洋を取り入れようとした。ところが、これは云ふまでもないことでありますが、封建的なしきたりや社会の中で、工業力とか近代的な軍隊とか、さういふものだけ取り入れようとしたつてうまくゆくもんぢやない。優秀な軍隊、優秀な工業力をつくるにはどうしても教育が要る。教育によつて国民の知力を高めるには、これまでのやうな身分制度をしいて、家柄さへよけりやどんな馬鹿でもいい地位につく、といふやうなことをやつてゐちや駄目だ、身分制度を打破しなければ国民の実力が發揮されない。さういふことからいろいろの改革が行はれてきて、ただ工業力、軍事力を取り入れるといふやうなことから、さまざま社会的変革が起つてきた。これは当然なことで、また日本ではいろんな理由があつて、さういふ改革がかなりうまくゆきました。

さういふところから、明治時代が生れてくるわけですが、しかしその時代の気風では実用といふこと、ものの役に立つといふことが根本であつて、万事に優先して考へられた。近頃は、明治時代には人権などを重んじないことが多かつたとか、社会問題を顧みない政治家が多かつたとか、といふことがよく云はれます。それはその通りでありますけれども、時代のいちばんの問題は、さういふところにはなかつた。つまり何とかして、日本の工業力、軍事力を、西洋に追いつくところまでたき上げよう、かういふ必要があつたので、その根柢には西洋の圧力がありました。

これはもう我々にはちよつと想像のつかないことであつて、私は明治生れでありますけれども、明治といつても明治四十四年ですから、明治の最後から二番目の年で、明治のことは何も覚えてゐない。どうも困つたもんで

すけれども、明治時代の人は、ことごとくに西洋といふものの優越を意識してゐた。それに比べて日本のものは、どうも何もかも駄目ぢやないか、といふやうなことをしきりに考へてをりまして、その根柢には、西洋の圧迫でもつて、日本はいつか独立を失ふんぢやないか、さうすると日本人全体が非常にみじめな、奴隸の位置に落ちるんぢやないか、かういふ危惧があつたわけであります。みなさんは、そんな馬鹿なことがあるわけはないといふふうに思ふだらうし、私なんかも実感としては、さういふことはわからないのでありますが、どうも当時の文献を読んでみるとさういふ不安といふものが、かなり現実性をもつて、みんなに感じられたやうであります。

福沢諭吉が、晩年に「福翁自伝」といふ有名な本を書いてをりますが、その明治初年のところを見ますと、福沢は、明治政府はばかだと思つてゐたら案外利巧だから、自分は政府には這入らないけども、外から助けてやらう、といふぐらゐな気持をもつて、当時、時代の先頭に立つて仕事をしてゐた人ですが、それが日本の状態を見ると、おそらく明治五六年の話ではなかつたかと思ひますが、どうも将来独立を失つてしまつて、西洋人がおぼりちらす下で、みじめな生活をしなきゃならない、さういふ時代が来るんぢやないか、といふやうなことをしきりに考へてゐたやうです。まあ自分一代はこれでいいけれども、子供をどういふふうにしたら、さういふ災難から守れるだらう、といふふうになんぢやないか、といふことは、西洋人を見てゐるとキリスト教の坊さんを重んじるやうだ。だから自分の子供はキリスト教の神父なり牧師なりにしよう、さうすれば、いくら西洋人がおぼる時代が来ても大丈夫だ。あまり馬鹿にされないで暮していけるだらう、かういふことを真剣に考へたと云つてをります。それにつけ加へて、自分は一片の宗教心があるわけではないが、子供の将来を考へると、かういふことを考へて、実に滑稽な次第であつたといふことを云つてをりますが、その時分は滑稽どころでなくて、真剣な心配であつたのです。

また、現在では人種的偏見といふやうなことはいけなしいといふことは、西洋人自身も認めてゐる国が大多数のやうであります。その時分はさうぢやない。たとへば尾崎行雄が、明治の中ごろ船に乗つてアメリカへ行つたことがある。さうすると、そこに中国——当時の清国ですね。清国の公使が乗つてゐた。公使といへば外交官の